研究

わらしべ長者考

――宇治拾遺物語を中心にして――

石原幸子

目次

序
本論
第一章　説話集諸本のわらしべ長者（略）
第一節　説話集諸本の成立及び相互関係
第二節　「わらしべ長者」説話における諸本の本文の異同
第二章　昔話における「わらしべ長者」
第一節　「わらしべ長者」の分布
第二節　原話の考察
第三章　宇治拾遺・古本説話集・今昔・雑談集と昔話との相互関係（略）
第一節　説話集と昔話との素材の相違
第二節　昔話の「わらしべ長者」説話の目的
第三節　「わらしべ長者」説話の伝播について
結語
参考文献

序

本論で取り扱う「わらしべ長者」は「宇治拾遺」巻七の五『長谷寺参籠ノ男預利生事』で、この話は「今昔」、「古本説話集」、「雑談集」にもあり、民間にも広く流布している。この「わらしべ長者」には成功したいという人間の欲望が如実にあらわれているので私は強くひきつけられた。「わらしべ長者」における説話集と昔話との関連性、伝承をたどり、この話の原形の話を推定したいと思う。

第二章　昔話における「わらしべ長者」

日本全国に「わらしべ長者」がどのくらい存在するのかを「日本昔話集成」（関啓吾編）で調べると、二十五話が今までに採集されている。

ここで昔話の特徴・性質を把握しておこう。折口信夫氏[注1]は『特殊な人物、愚昧者か、誇張家か、智者かといふ風に、事件の特異性を救ふ主人公を出して来る。人物・集団は仮空的のものとなって行き、或一人の偶然の事件といふ風に説く』と述べておられる。そして、柳田国男氏[注2]によると、

『昔話とは、一、説く人聴く人が最初から信じようとしなかったもの、それ故に古い形をいつ迄も保存し得るものであった。二、定まった形がある。三、話を信じないがために一部の修飾誇張が行われやすい』の三点をあげておられる。であるから、話の中間形式が各地でいろいろな発達をとげたのであろう。

第一節　「わらしべ長者」の分布

全国に流布している「わらしべ長者」がどのように分布し、それぞれの話がどの程度の相違を示しているかを調べたいと思う。

まず、二十五話の「わらしべ長者」を地域的に分類すると、東北地方に九話、中部地方に一話、中国地方に四話、四国地方に四話、九州の島々に七話である。さらに、二十五話は二つの系統に分類できる。それぞれの梗概を示すと以下のようになる。

A、男が観音に願かけをしての帰りに藁を拾う。途中で虻をつかまえ藁でしばって持っていると貴人の子が泣いていたので与え、みかんをもらう。喉の渇きで困っている呉服屋とみかんと布とを交換する。さらに死馬と布をかえ、馬に水を飲ませたら生き返り、大きな家の主人に馬を貸し、家を借りるが家の主人が戻らなかったので、家をもらい一生安楽に暮らした。（安芸国昔話集）

分布地域……岩手県紫波郡、福島県双葉郡（4）、岐阜県吉城郡、広島県呉市

B、男が娘がほしいと長者に言うと、藁一本から千万長者になれたら娘をやると、藁を男に渡した。老人が風で植木の倒れそうになっているので藁をやり、お礼に芭蕉の葉をもらう。雨が降りだして、味噌に蓋がないので困っている人に芭蕉の葉をあげると、味噌をひとかたまりくれた。ある家に泊まると、盲の婆さんが一人いて、男は味噌を出し二人で食べた。あまり味噌が塩辛いので、飛び上った拍子に婆さんの目があいた。お礼として剃刀をもらった。旅を続けていくと、侍にあい剃刀でひげをそり、お礼に脇差しをもらう。次に殿様の行列に会い、殿様から脇差しを所望され、大金をもらった。男はすぐ長者の家に行き、娘と結婚した。（壱岐島昔話集）

分布地域……岩手県江刺郡・稗貫郡・上閉伊郡（2）、島根県邑智郡、岡山県御津郡、広島県世羅郡、徳島県美馬郡（2）、香川県香川郡、愛媛県温泉郡、長崎県壱岐島・五島、鹿児島県甑島（2）、琉球喜界島・沖永良部島・中頭郡

次に内容・結末に留意すれば、祈願・おつげがあるもの四話、長者になるもの四話、難題聟系統三話、長者の聟となるもの四話、大蛇退治が挿入されているもの十話、残りは怠け者が大家に出世する話と、死体運びをしてその死体が黄金をまいて去るという大歳の客系統の話となる。

第二節　原話の考察

次に原話がどのようなものであったかを、考える上で、

保存される部分と語り手の自由に改変できうる部分について考える必要があると思う。柳田氏の言を借りると[注3]『昔話が歌物語などのやうに、敢て全篇の逐句的暗誦を要求せず、単に中間若干の重要なる辞句を記憶せしめて其他を自然の再現に放任してあった』とのべておられる。「わらしべ長者」でいえば、藁一本から成功したということが根本である。そして藁から次々と変わる品物が保存部分になり、なぜ交換したかということが自由部分である。ここで注意すべき点は時の流れとともに昔話が短くなる傾向にあるということである。その理由として、一、時間の短縮、二、話の種の増加、三、昔話を聞く者の態度の変化などが考えられる。

このことを参考にして、もっとも古い形がどのようなものであったかを考える為に、要素・結末に留意して考察を加えてみよう。

結末＼要素	虻(蜂)	おつげ祈願	難題聟	大歳の客	大蛇退治	昔話の数
長者・庄屋	4	3	0	0	1	7
家来・家	1	1	0	0	1	3
金	0	0	0	1	5	6
米	0	0	0	0	1	2
長者の聟	1 (2)	0	3	0	2	7

右の表から、(1) 大蛇退治が十話含まれている、(2) 虻・蜂などの小動物の援助、(3) 結末は三通り、つまり、長者・庄屋、金・米、長者の聟に分かれる、以上三つの点が判明する。これら三点について述べて、原話がどのようなものであったかを推定したいと思う。

(1) 大蛇退治

話数は十話みられるが、例外として岩手県上閉伊郡は、継母のために味噌桶に打込まれた亡霊の退治、島根県邑智郡は狼退治、琉球喜界島は鬼退治の三話が存在する。そして七話の大蛇退治の分布地域は、四国と九州の島々だけである。

このような地域的特色があるのは、大蛇退治が何を意味しているかに関連してくると思う。昔から大蛇は水神として信仰されていた。[注4] 水神は稲作中心の我が国では穀物の豊穣をもたらすべき神であった。「わらしべ長者」では多くの場合、大蛇を三年味噌と交換した錆刀で退治している。特に、三話は眠っているうちに、錆刀が退治したとある。これは大蛇退治が刀の所有者の力に依るものではなく、刀自身の霊力であることを顕著ならしめんがためのものであろう。このことは刀・錆刀も水神と関係があることを示している。「わらしべ長者」においては、二つの水神が争い、力の強い刀が大蛇を支配したと考えられる。

以上のように、大蛇退治の意味するものが水の支配であり、さらに稲作支配であるならば、九州の島々と四国にこの話が分布していることもうなずけるのでは、ないだろうか。

(2) 小動物の援助

表から、虻は六話、蜂は二話あらわれている。ここで疑問に思うのは、虻はA系統の話、蜂はB系統の話にと、はっきり分類されることである。これを明らかにするために、他の昔話を調べたが、その結果、虻は「わらしべ長者」の

A系統にだけあらわれ、他の昔話にはあらわれていないのである。ここでA系統の話を検討すると、観音のお告げ・話の展開の一致など、「宇治拾遺」その他の説話集との類似点がある。さらには、虻が他の昔話にあらわれていないことから、A系統の話が説話集を、かつて読んだものの記憶に出たものであると推定される。

虻に比して、蜂は難題聟、蜻蛉長者、天人女房にみられ、これらの話の蜂は何ら助ける根拠のない人を援助しているのである。そして、その働きも難題聟では、三つの難題をすべて蜂のおかげで解決しているように、個人の一生の幸福を支配する程、大きな力をもっている。

虻と蜂との関係について、柳田氏は、『虻という発想が、説話集の著者の独創ではなく語部の口に伝わっていた蜂の援助を、無意識に、継承したのではないか』と述べておられる。つまり、現存の昔話では消滅してしまった古い形を偶然にも説話集の編者がとらえて蜂から虻へと変形させて記録したと考えられる。[注5]

(3) 結末について

結末が長者・庄屋になるのは七話、家来・金・米は十一話、長者の聟は七話である。最も多いのは、家来・金・米であるがこれは長者話とはいえない結末である。しかも、そのうちの七話は大蛇退治である。大蛇退治の項で述べたように、大蛇退治の意味するものが水の支配、稲作支配ならば、金や米の結末というのは適当ではないし、まして殿様の家来や家をもらったなどというのは論外だと思う。この結末になった原因は、大蛇と水神信仰との関連性が薄れていったからだと考えられる。大蛇が水神として存在しなくなったが故に、妥当と思われる金・米という合理的な結果に改作せられたのであろう。元来は長者なり、長者の聟になることであったと推測される。

次に、長者の聟は結果的には長者になるのであるが、日本の昔話において、婚姻によって長者になるという長者話は数多くある。たとえば炭焼長者、田螺長者、難題聟などの系統である。柳田氏も、「桃太郎の誕生」で、『それからなお一方のなまけ者と貧乏人とが、美しい上臈を妻に得た話、―略―これがいずれもみなやすやすと長者の聟になる話であって、いわば身に負わぬ大望とその案外な成就とがよほどはやくから説話興味の中心をなしていたのである』と述べておられるように長者話には福分ある女をめとることが、重要な要素として存在し、「わらしべ長者」も、それに属するのではないかと思う。

三点を考察した結果、昔話における「わらしべ長者」の原話は次の条件を含んでいたと思われる。

① 蜂などの小動物の援助

② 婚姻による長者への成功

大蛇退治に関しては、その分布が四国・九州の島々にだけみえ、全国的ひろがりを示していないので、原話の条件から除いておきたい。

結語

以上、「宇治拾遺」、「古本説話集」、「今昔」、「雑談集」、昔話の「わらしべ長者」について考察しおわった。本論を要約すると、次のようになる。

① 四書の説話集のなかで、本文が密接なのは「宇治拾遺」と「古本説話」である。そしてもっとも古い形を伝えているのは「古本説話集」であろう。

② 昔話の原話は、小動物の援助、婚姻による長者への成功、この二条件が必要不可欠なものであったと考えられる。

③ 説話集諸本は観音霊験譚であり、昔話は成年式譚と考えられる。これは民間に流布していた成年式譚の「わらしべ長者」を素材に、観音霊験譚に改作した話を説話集の編者が記録したと考えられる。

これまでみてきたように、「宇治大納言物語」が存在すれば、「宇治拾遺」、「古本説話集」、「今昔」などの成立とそれぞれの相互関係が明らかになるし、口承か否かも判明するのではないだろうか。平安末期から鎌倉時代にかけての説話文学において、宇治大納言隆国と彼の作である「宇治大納言物語」は大きな意義をもっていると言えよう。

注1 「民俗学」 折口信夫全集 十五巻
注2 「昔話採集者の為に」 定本 柳田国男全集 六巻
注3 「昔話採集者の為に」
注4 日本民俗学辞典
注5 「昔話と文学」

謙譲の補助動詞に関する一考察

——平安鎌倉期の和文資料による——

永江和子

目次

序
一、研究の動機と目的
二、取り扱う語　四作品について
三、使用状況を見るにあたって
四、考察方法
本論
第一章　各々の語の時代的変遷
第二章　各作品の謙譲の補助動詞
Ⅰ　落窪物語